# 川原遺跡II

一 3次調査 一

大野城市文化財調查報告書 第96集

2011

大野城市教育委員会

# 加度遺跡 II

一 3次調査 一

大野城市文化財調查報告書 第96集



2011

大野城市教育委員会

# 序

福岡県大野城市は、福岡平野南部に位置し、西暦665年に築かれた日本最古の朝鮮式山城「大野城跡」にその名を由来する、古い歴史と豊かな自然に恵まれた緑の街です。市域は南北に長い形をしており、大野城跡・水城跡・牛頸須恵器窯跡の国指定史跡をはじめ、多くの歴史遺産があります。

川原遺跡は市の北部に位置し、江戸時代の畑詰村の一部にあたります。 今回実施した第3次発掘調査では、中世以降の遺構・遺物が確認されました。 また、第3次調査地から北西に約100m離れた第1次調査地でも同じ時期の 遺構が確認されていることから、畑詰村が中世頃に成立し、近代に至るまで 継続・発展していたことが明らかになりました。こうした中世集落の調査は、 博多・太宰府といった当時の都市の間にある大野城市周辺の村落景観を明 らかにするもので、今後本書の成果が教育や研究の面において、広くご活用 いただければ幸いに存じます。

最後になりましたが、発掘調査ならびに報告書作成にあたりご理解と全面 的なご協力をいただいた染原ツタ代氏や(株)上村建設に対し、厚く御礼申し上 げます。

平成23年3月25日

大野城市教育委員会 教育長 古賀 宮太

# 例 言

- 1. 本書は、大野城市教育委員会が集合住宅建設にともなって発掘調査を実施した、大野城市 仲畑3丁目81-1・2 所在の川原遺跡第3次発掘調査の報告書である。
- 2. 発掘調査・整理作業は、染原ツタ代氏の委託を受け大野城市教育委員会が実施した。
- 3. 本書における遺構の分類番号は、SA: 柵・土塁・塀、SB: 掘建柱建物、SC: 竪穴住居跡、SD: 溝、SE: 井戸、SF: 道路状遺構、SH: 広場、SJ: 甕棺墓、SK: 土坑、SP: ピット、SR: 祭祀遺構、ST: 古墳・木棺墓・土坑墓・石棺墓、SX: 性格不明遺構とした。
- 4. 発掘調査は、大里弥生(当時嘱託)が担当し、整理作業は石木秀啓・渡邊和子が担当した。
- 5. 遺構写真は、大里が撮影した。
- 6. 遺物写真は、フォトハウス OKA (岡紀久夫:埋蔵文化財写真研究会員) が撮影した。
- 7. 遺構実測図は、大里が作成した。
- 8. 遺構実測図中の方位は座標北を表し、図上の座標は国土座標を示す。
- 9. 遺物実測図は、國分由美・上方高弘・渡邊・石木が作成した。
- 10. 製図は、渡部美香が作成した。
- 11. 拓本は、國分が作成した。
- 12. 観察表は、國分・石木が作成した。
- 13. 本書に掲載した地形図は、国土地理院発行の 1/25,000 地形図『福岡南部』を使用した。
- 14. 本書の遺物・実測図・写真はすべて大野城市教育委員会が管理・保管している。
- 15. 本書に使用する土色名は、『新版標準土色帖』農林水産省農林水産技術会事務局監修を使用した。
- 16. 本書の執筆・編集は石木がおこなった。

# 本 文 目 次

I.はじ&	かに	
1.調査	至にいたる経緯・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・	
2.調査	<b>査体制・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・</b>	1
II.位置と	<b>∠環境・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・</b>	2~5
Ⅲ.調査(	D結果	
1.調査	章概要・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・	····· 6~7
2.遺標	<b>觜と遺物・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・</b>	····· 7~16
Ⅳ.まとめ		
1.遺標	<b></b> あいまり	
2. 中世	せの畑詰村と本光寺・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・	
3. 大里	予城市内の中世集落と川原遺跡・・・・・・・	20
	図版	日次
		П %
図版 1	(1)調査前全景(西から)	
	(2) 調査後完掘状況全景(西から)	
図版2	(1) SK01完掘状況(南から)	
	(2) SK01土層 (南から)	
図版3	(1) SK02完掘状況 (南から)	
	(2) SK02遺物出土状況 (西から)	
図版4	(1) SX02焼土検出状況 (西から)	
	(2) SX02土層 (東から)	
	(3) S X 02完掘状況 (西から)	
図版5	(1) SX01土層 (北から)	
	(2) 古銭出土状況 (西から)	
	(3)調査区南壁土層(北から)	
図版6	3次調査出土遺物①	
図版7	3次調査出土遺物②	
図版8	3次調査出土遺物③	

# 挿 図 目 次

第1図	川原遺跡周辺遺跡分布図(1/25,000) · · · · · 3
第2図	川原遺跡調査地位置図(1/2,500)・・・・・・・5
第3図	3次調査地遺構配置図(1/100)・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・
第4図	調査区南壁土層実測図(1/60) 7
第5図	SK01·02実測図(1/40)······7
第6図	SK02出土遺物実測図(1/2、1/3)·····8
第7図	SX01·02実測図(1/40)······9
第8図	SX03·04実測図(1/40)······10
第9図	SX05実測図(1/40)······10
第10図	SX01~05出土遺物実測図(1/3、2/3)······11
第11図	SD01·03出土遺物実測図(1/3、2/3)······12
第12図	SP実測図(1/30)······ 13
第13図	SP出土遺物実測図(1/3、2/3)·····14
第14図	表土・検出面・試掘トレンチ出土遺物実測図(1/3、2/3)・・・・・・・16
	表目次
表1 /	川原遺跡第3次調査出土遺物観察表①・・・・・・・・・・・・・・・・・17
表2 丿	原遺跡第3次調査出土遺物観察表②・・・・・・・・・・・・・・・・18
表3	原遺跡第3次調査出土遺物網察表③・・・・・・・・・・・・・・・・ 19

### I. はじめに

#### 1. 調査にいたる経緯

川原遺跡は、大野城市仲畑3・4丁目を中心に広がる。遺跡の範囲は、大野城市仲島遺跡、福岡市井相田A遺跡に接する。過去に2次にわたる発掘調査が実施され、今回報告するのは3次調査である。発掘調査を実施したのは大野城市仲畑3丁目81-1・2にあたる。

当該地は、平成21年10月6日に試掘調査を実施し、現地表下1.3~2.4mで遺構が確認された。開発内容としては鉄筋コンクリートのマンション建設が予定されており、計画どおりに工事が実施されると遺構が破壊されるため発掘調査が必要として、工法の変更など文化財保護を求めて協議をおこなった。しかしながら検討の結果建設工事内容は変更されず、建物により破壊されると判断された箇所の発掘調査が必要と判断された。

事業者からは、埋蔵文化財発掘調査依頼書が平成21年10月14日に提出され、建設予定図面を沿えて平成21年10月26日付けで発掘届を福岡県教育委員会文化財保護課あて提出し、発掘調査実施の指示が出された。なお、調査は平成21年度に実施するが、整理・報告書作成までは単年度では実施不可能なため、これを平成22年度に実施する旨、協定書を締結し、年度ごとに委託契約を締結し事業を実施した。

発掘調査は、平成22年1月29日~3月30日の間実施した。調査面積は、事業対象面積821.15㎡のうち約200㎡である。整理作業は平成22年度に実施した。なお、発掘調査および整理作業に関する費用は、市と事業者で50%ずつ負担した。多大なるご理解とご協力をいただいた染原ツタ代氏ならびに上村建設株式会社に感謝申し上げたい。

#### 2. 調査体制

平成21・22年度の発掘調査ならびに整理作業における調査体制は以下のとおりである。

教育長古賀宮太教育部長森岡 勉ふるさと文化財課長舟山良一係長中山 功

主査 徳本洋一 石木秀啓 丸尾博恵 主任技師 林 潤也 早瀬 賢 上田龍児

嘱託 石川 健 吉田浩行

下高大輔 中島 圭 大里弥生(以上、~22年3月) 茂 友美 國分由美 渡邊和子(以上、22年4月~)

#### 〔発掘調査参加者〕

竹谷豊 金田忠征 池田公見 岩男澄子 田中千恵子 宮田恵子 村山龍子 田部澄博 坂口貞裕 加藤重治 仁部屋良子 高野なぎさ 荒田洋美 大海雅子 高木幸子 藤田和子 篠崎繁美 小川ケイ子 横山唯(福岡大学生) 田村杏士郎(福岡大学生) 久保翔平(福岡大学生)

#### [整理作業参加者]

穴井和子 船越桃子 深野人美 大薗英美 仲前冨美子 井口るみ子 松岡信子 町井裕子 村山律子 白井典子 仲村美幸 井上理香 渡辺美香

## II. 位置と環境

大野城市は福岡平野南部に位置し、市域は南北に細長く、よくヒョウタンの形に例えられる。市域の北側は井野山・乙金山・大城山、南側は牛頸山を最高所とする丘陵が広がり、南北の山塊に挟まれた市の中央部は御笠川・牛頸川が貫流し、段丘面・沖積平野が広がる。川原遺跡は、御笠川左岸の沖積平野に立地し、3次調査地の小字は本村(ほんむら)、旧畑詰村にあたる。現在の地名では仲畑3・4丁目にあたる。

川原遺跡は、明治時代に発行された25,000分の1の地形図を見ると、旧畑詰村の集落域にあたるようである。調査前は工場があり、それ以前は畑や牧場として利用されていたとのことである。周辺の調査では、弥生時代以降の遺構・遺物が確認されている。以下、簡単に歴史的環境を概観したい。

弥生時代は、川原遺跡2次調査地で前期の集落が確認される。また、川原遺跡の北西約1kmにある井相田C遺跡3・4次調査や麦野C遺跡第5次調査でも前期の竪穴住居跡が確認されており、この時期から集落域の平地への進出が認められる。墓地は、塚口遺跡・御陵前ノ椽遺跡・中・寺尾遺跡など平地に近い丘陵上に前期の甕棺墓・土坑墓が確認されている。

中期に入ると遺跡数は増大する。仲島遺跡・石勺遺跡・森園遺跡などの平野・丘陵部に安定した集落・墳墓群が形成され、後期においても継続する。川原遺跡周辺でこの時期の注目すべき遺跡として、仲島遺跡が挙げられる。仲島遺跡からは、貨布や青銅製鋤先などの重要な遺物が見つかっており、拠点集落の一つと考えられる。

#### 遺跡名

1川原遺跡 2御笠の森遺跡 3宝松遺跡 4村下遺跡 5雑餉隈遺跡 6仲島遺跡

7仲島本間尺遺跡 8持田ヶ浦古墳群 9御陵古墳群 10唐山古城跡 11喜一田古墳群 12・13王城山古墳群

14松葉園遺跡 15~17古野古墳群 18森園遺跡 19中寺尾遺跡 20ヒケシマ遺跡 21薬師の森遺跡

22ウド遺跡 23原口古墳群 24銀山古墳群

25ウド古墳 26雉子ヶ尾遺跡 || 27雉子ヶ尾古墳群 28雉子ヶ尾遺跡 || 29原田遺跡 30金山遺跡

31深町古墳 32曲り目遺跡 33金ヶ浦遺跡 34石勺遺跡 35瑞穂遺跡

36国分田遺跡 37原ノ畑遺跡 38後原遺跡 39御供田遺跡 40ハザコ遺跡

41・46谷川遺跡 42末次遺跡 43天神田窯跡 44本堂遺跡 45上園遺跡 47水城跡 48成屋形遺跡

49金隈上屋敷遺跡 50影ヶ浦遺跡・古墳群 51堤ヶ浦古墳群

52持田ヶ浦古墳群F群 53持田ヶ浦遺跡 54高畑遺跡 55麦野A遺跡群

56井相田A遺跡群 57麦野C遺跡群 58麦野B遺跡群 59南八幡遺跡群 60中ノ原遺跡

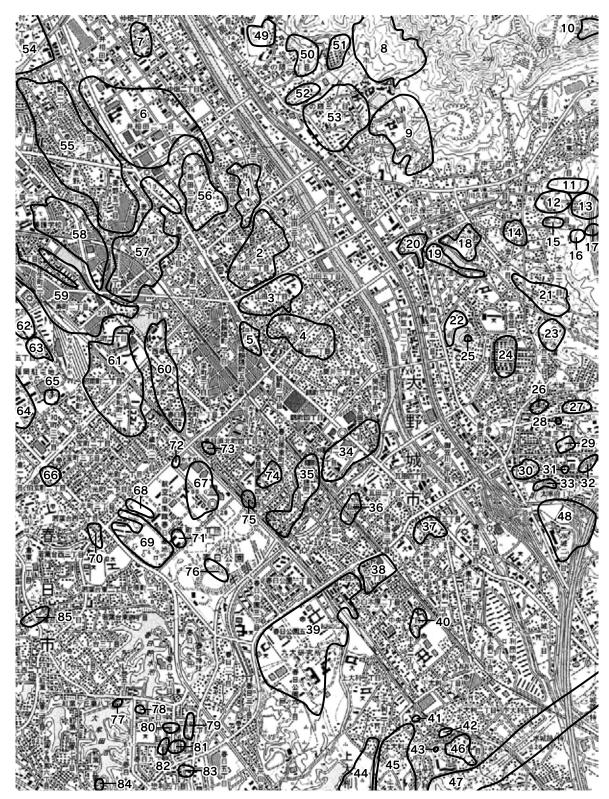
61雑餉隈遺跡群 62下大荒遺跡 63大荒遺跡 64上平田·天田遺跡 65大坪遺跡

66サヤノマエ遺跡 67駿河A遺跡 68先ノ原B遺跡 69立石遺跡 70西ヶ浦遺跡

71先/原遺跡·春日公園内 72原町遺跡 73駿河D遺跡 74駿河E遺跡 75駿河B遺跡

76春日公園内遺跡 77大牟田池窯跡 78惣利1号窯跡 79惣利北遺跡 80惣利遺跡

81惣利東遺跡 82惣利西遺跡 83惣利東B遺跡 84大牟田遺跡 85小倉水城跡



第1図 川原遺跡周辺遺跡分布図(1/25,000)

古墳時代に入ると、原ノ畑遺跡・瑞穂遺跡・石勺遺跡などで良好な前期の集落が見つかり、御陵古墳群からは三角縁神獣鏡が出土した。前期から安定した集落や有力な墳墓があった。乙金山・大城山から西側にのびる丘陵には、笹原古墳・王城山古墳群など中期から後期にかけて大規模な墳墓群が形成される。近年この地域で進められている乙金第二区画整理事業地内の調査では、後期の集落が濃密

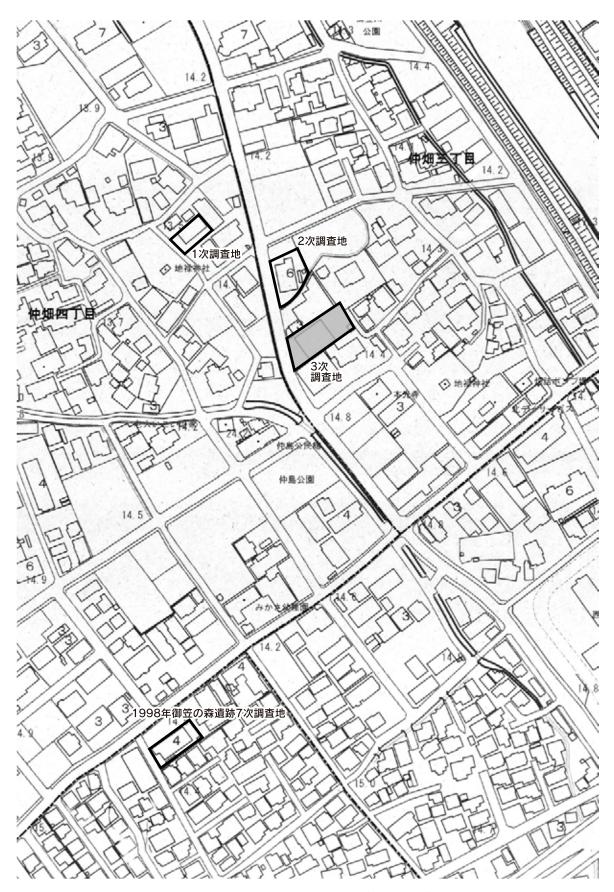
に展開することが明らかになってきており、出土遺物の中には、朝鮮半島との関わりをもつ遺物も含まれている。これまでこの地域では、王城山古墳群のように新羅土器が出土する古墳があり半島との関わりが注目されていたが、より具体的な地域の在り方が明らかにできるものと注目される。

飛鳥・奈良時代に入ると、大宰府が成立し各地に官衙が設置される。川原遺跡の西側400mには、水城東門からのびる官道(東門ルート)が想定されている。大野城市内では東門ルートの道路状遺構は発見されていないが、想定される東門ルートは御笠の森のすぐ横を抜けるようであり、『日本書紀』神功皇后に見える御笠伝説からも古代の道がこの周辺にあったと考えることができる。ルート上にあたる御笠の森遺跡では、役人の所持品である石帯が出土しており、官道沿いに集落が展開している状況が伺える。

平安時代には、大宰府を含め、遺跡数が大きく減少する。奈良時代に隆盛を誇った牛頸窯跡群は、9世紀に入ると生産量が急減し、9世紀中頃には生産を終了する。ほぼ同じ時期には集落数も減少しており、仲島遺跡の集落も姿を消す。10世紀になると、再び遺跡数の増加が認められる。本堂遺跡群では、11世紀後半から遺構・遺物が急増しており、7次調査地では「大日如来」の墨書土器があり、寺があった可能性が高い。市北部の塚口遺跡や森園遺跡などでは、12世紀前半ごろの墓が確認されており、四王寺山西麓の丘陵上に散在的に墳墓が展開することが知られていた。これに加えて、平成19年度から本格化した乙金第二区画整理事業地内では、この時期の集落・墳墓の調査が進められ、様相が明らかになりつつある。

鎌倉〜戦国時代では、御笠の森遺跡が知られている。川原遺跡の南方に近接するこの遺跡は、16世紀になると村の周りに溝を巡らせいくつもの区画を作る。全体的な様相は不明であるが、溝を巡らせることから防御性は高く、文献から見るとこの辺りの中心的な村であったようである。この村は山田村と呼ばれ、延宝年間(1673~1681年)には現在の山田4丁目あたりに移転したことが記録に残っている。同じような集落は、春日市上白水館跡、諸岡遺跡などでも確認されており、拠点的に集落が営まれていた様子が明らかになっている。また、戦国時代はこの地域も争乱の舞台となり、井野山に唐山城、四王寺山南麓に岩屋城など、多くの山城が造られている。

江戸時代、大野城市は福岡藩に含まれる。雑餉隈遺跡は、博多~二日市~甘木~日田へ通じる日田街道、現在の県道112号線に隣接し、18世紀ごろの遺物が出土している。後原遺跡は近世白木原村の本村にあたり、17世紀以降の遺構が確認される。この時期の村落は、現在の集落域とほぼ重複するものと考えられ、現在の大野城市にあった村はほぼすべてが純農村であった。



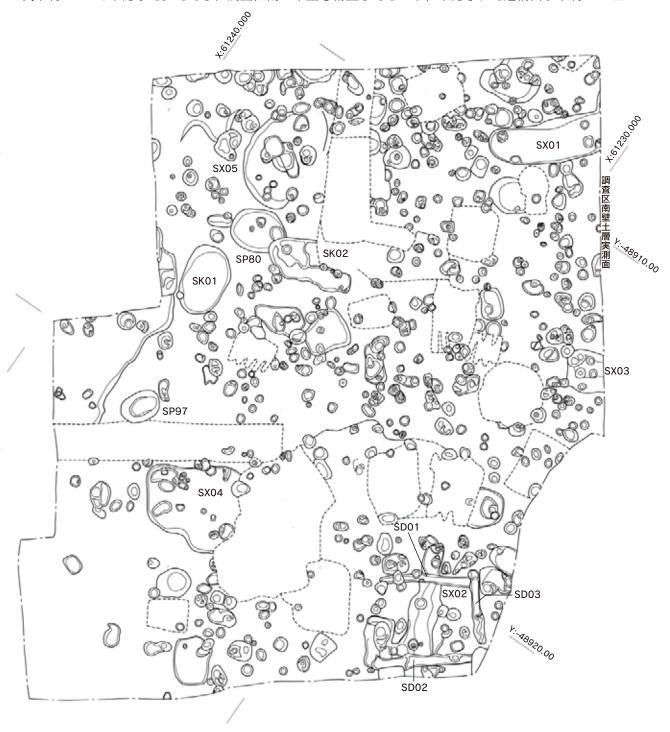
第2図 川原遺跡調査地位置図(1/2,500)

# Ⅲ. 調査の結果

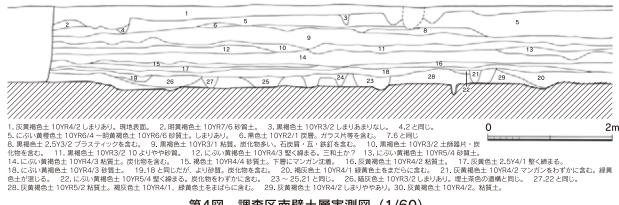
#### 1. 調査概要

川原遺跡は、平成22年1月29日~3月31日の間に発掘調査を実施した。調査前、当該地には工場があり、西側に隣接する道路よりやや高くなっていた。試掘調査の結果も、遺構面は東側が高くなっている(比高差約1.1m)。

調査は、マンション建設部分を対象とし、対象地全体を一度に表土剥ぎして実施した。遺構面は現地表下約1.3mで確認した。ただし、調査区南・東壁を精査したところ、確認された遺構面より約20cm上



第3図 3次調査地遺跡配置図(1/100)



第4図 調査区南壁土層実測図(1/60)

で灰黄褐色土を基盤とする遺構面が確認された(第4図)。また、さらに約50cm上では固く締まる層 が確認され、土間の三和土の可能性が考えられた。したがって、調査地は時代を経るごとに次第にか さ上げされていたものと考えられる。

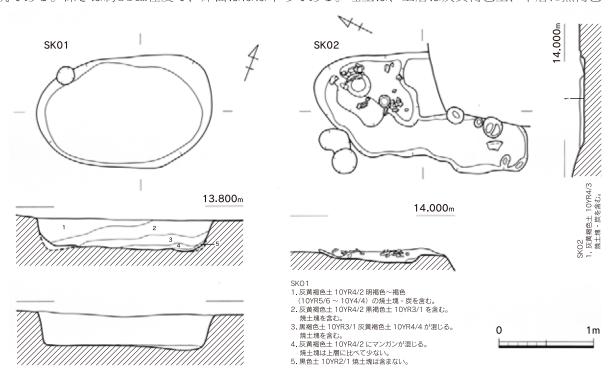
検出された遺構は、土坑・ピットなどがある。出土遺物は、弥生土器・須恵器・土師器・陶磁器・ 石器・銅銭などがある。これら出土遺物の内、大半を占めるのは土師器・陶磁器であり、時期の中心 としては12世紀以降と判断される。このことは、北側に近接する2次調査地で主体として確認された 弥生時代前期の遺構群とは対照的である。

#### 2. 遺構と遺物

#### (1) 土坑

#### **SK01**(第5図·図版2)

調査区の北側中央部に近いところで検出された。長さ1.86m、幅1.15mの楕円形プランを呈する土 坑である。深さは約35cm程度で、床面はほぼ平らである。埋土は、上層は灰黄褐色土、下層に黒褐色

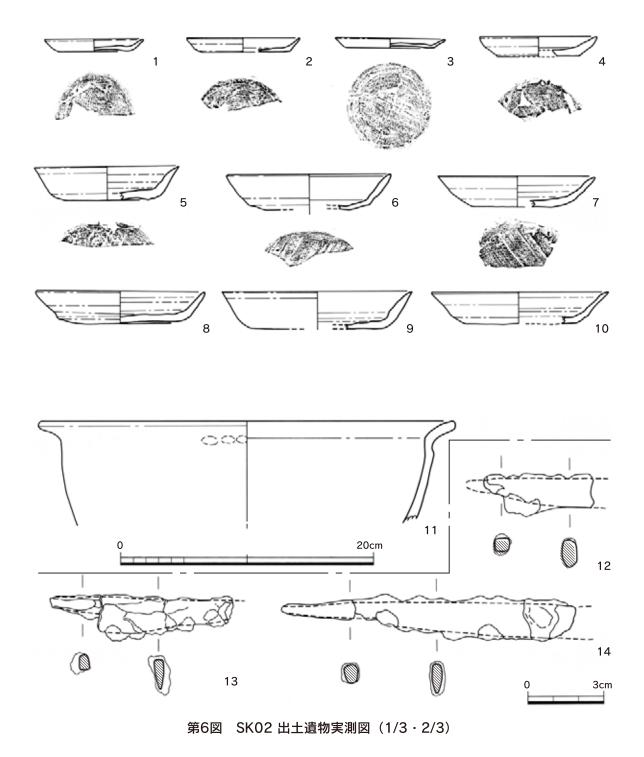


第5図 SK01 · 02実測図(1/40)

土が認められた。埋土中には10cm以下の焼土塊が多く含まれているが、土坑内部に焼成面は確認できない。埋土中からは、土師器杯や焼土塊が出土したが、図化できるものはなかった。

#### SK02 (第5図·図版3)

調査区のほぼ中央よりで検出された。長さ2.24m、幅1.08m。試掘調査時のトレンチにより東南隅部を失っているが、略長方形プランを呈する土坑である。深さは最大17cmと浅く、埋土灰黄褐色土、炭化物・焼土塊を含む。床面は凹凸があり、北側からは土師器などがまとまって出土したため、10群に分けて取り上げをおこなった。出土遺物には、土師器・黒色土器・陶器・磁器などがありまとまって出土した。



- 8 -

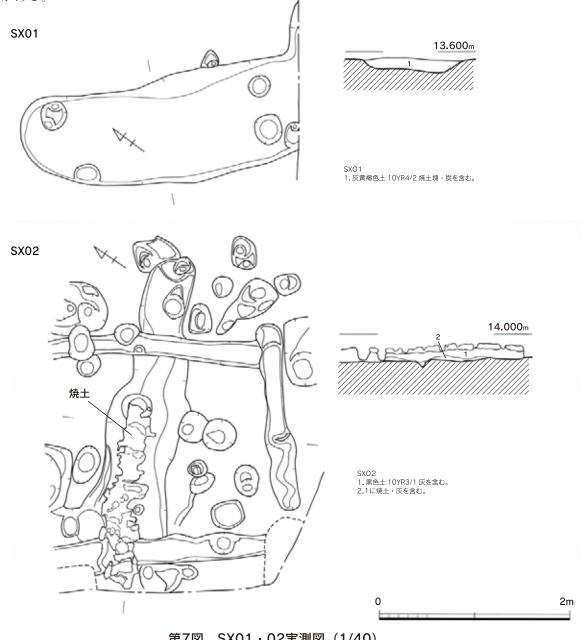
#### 出土遺物 (第6図·図版6)

1~11は土師器である。1~4は小皿。いずれも底部糸切り。小片が多いが、ほぼ完形となる3は 口径8.6~8.9cm、器高0.8cm。他は復元口径7.8~9.2cm、器高0.9~1.55cmである。5~10は杯。い ずれも底部糸切り。2はほぼ完形で、口径13.4cm、器高2.5cm。他は復元口径11.4~15.0cm、器高 2.4~2.95cm。11は鍋。外面は口縁部と体部の境を除き煤が付着する。内面も煤付着。12~14は鉄刀 子。錆ぶくれが著しく、全形を確認することは難しい。

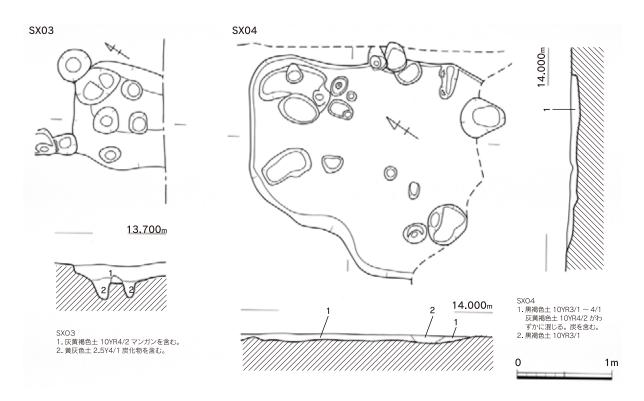
#### (2) 性格不明遺構

#### **SX01**(第7図·図版5)

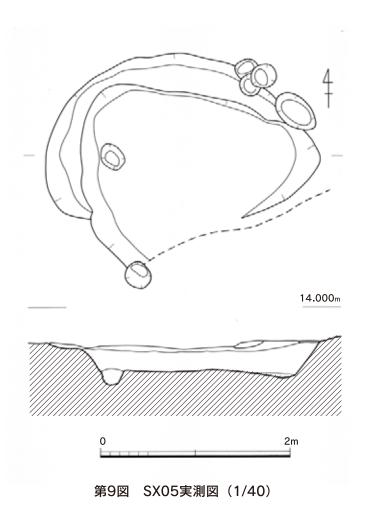
調査区東南側で検出された。南側は調査区外へのびており、全形は分からない。残存部では、長さ 2.92m、幅1.13mの長楕円形プランを呈しており、やや緩く曲がる。深さは10cm程度と浅い。埋土 は灰黄褐色土、焼土塊・炭を含む。出土遺物は、須恵器・土師器・黒色土器・瓦質土器・陶磁器・瓦 などがある。



第7図 SX01·02実測図(1/40)



第8図 SX03 · 04実測図 (1/40)

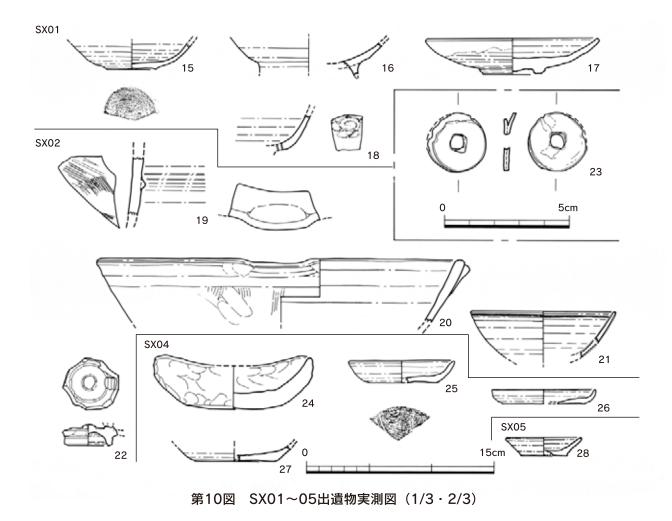


#### **出土遺物** (第10図)

15は一応土師器小皿としたが、違和感がある。別の器種かもしれない。底部糸切りで、体部は緩い丸みをもつ。口縁部は失われ全形は不明であるが、残存部上端はやや厚みを増している。外面は浅黄橙色であるが、内面はやや還元されて灰白色。焼成はよく硬く焼け締まる。16は黒色土器 A 類の椀。内外面ともに摩滅が著しい。17は陶器皿。高台は露胎で低く、体部外面上位から内面は灰緑色の釉がかけられる。18は染付椀。外面には花文が描かれる。肥前系。

#### S X 02 (第 7 図 · 図版 4)

調査区南西側で検出された。検出時に2m前後の不整形に広がる遺構を確認し掘り下げた。その結果、焼土が長さ1.92m、幅40cmほど帯状に検出され、当初検出された遺構は掘り込みを確認できなくなった。焼土は、北側の一部が還元して



おり、厚さは4~5 cm程度である。遺構はこの焼土下にあり、長さ3.56 m、幅0.78 m、深さは10 cmほどである。埋土は黒褐色土で、埋土上に焼土層が確認される。須恵器・土師器・瓦質土器・陶磁器・鉄製品・銅銭・焼土塊が出土した。

#### **出土遺物** (第10図・図版6)

19は瓦質土器の火鉢。体部の破片で、突帯上には三つ巴文がスタンプされる。20は瓦質土器の鉢。 片口がつく。焼成良好。内外面とも口縁部付近は灰白色、それ以下は灰色となる。重ね焼きの痕跡であ ろうか?21は染付椀。口縁部下に圏線が巡る。発色は良くない。肥前系。22は青白磁。水注の蓋か? 23は銅銭。2枚貼りつく。銭種不明。

#### SX03 (第8図)

調査区南側中央部付近で検出された。南側は調査区外へのびており、全形は分からない。残存部では、長さ0.96m、幅1.12mの方形に近いプランを呈し、深さは10cm程度である。床面にはピットが確認される。埋土は、土坑部分は灰黄褐色土を呈するが、ピット部分は黄灰色土となり、新旧関係がある可能性が高い。出土遺物は、須恵器・土師器・磁器(染付)があるが、図化可能なものはなかった。

#### SX04 (第8図)

調査区西側で検出された。南側は近代の撹乱により切られており、全形は不明であるが、残存部は不整形をなす。残存長さ2.46m、幅2.30m、深さ10cm程度と浅い。埋土黒褐色土。出土遺物は、須恵器・土師器・陶磁器がある。

#### **出土遺物** (第10図)

24は坩堝であろうか?手づくねで椀形に作られる。底部は平ら。25~27は土師器小皿。いずれも糸切り。体部が深いものと浅いものがある。

#### SX05 (第9図)

調査区東側で検出された。南側は試掘調査時のトレンチにより切られる。楕円形に近いプランを有し、長さ2.90m、幅は残存部で約2.0mである。遺構検出時、埋土に多くのピットが切り込んでいた。深さは約30cmである。出土遺物は、須恵器・土師器・磁器がある。

#### **出土遺物** (第10図 · 図版6)

28は土師器小皿。復元口径6.1cm、器高1.5cm。体部は外方に開き、口径の割りに器高が高い。

#### (3) 溝

#### SD01 (第7図)

調査区南西側で検出された。SX02を切り、SD03に切られる。幅18~26cm、深さ7cm程度、 溝の延長は2.36mで途切れる。埋土は灰黄褐色土。須恵器・土師器・瓦器・瓦質土器・土師質土器・ 磁器・燻瓦・焼土塊が出土した。

#### **出土遺物** (第10図)

29は陶器皿。高台は低く、露胎、畳付に砂目が3ヵ所残る。釉は濃緑色を呈する。

#### SD02 (第7図)

調査区南西側で検出された。SX02を切る。幅22~30cm、深さ4cm程度と非常に浅い。溝の延長2.74mで途切れる。埋土は灰黄褐色土。土師器・磁器・焼土塊が出土したが、図化できるものはなかった。

#### SD03 (第7図)

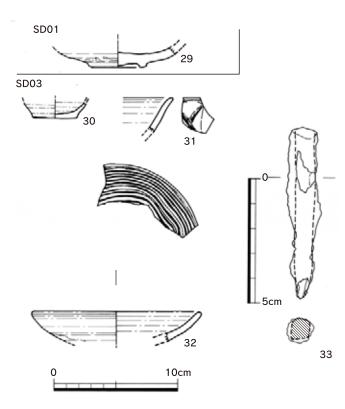
調査区南西側で検出された。SD01を 切る。幅18~30cm、深さ3~20cm程度 で、西側に向かって下がる。溝の延長は 約2.0mで、短く途切れる。須恵器・土師 器・瓦質土器・陶磁器・鉄製品・焼土塊 が出土した。

#### **出土遺物** (第10図)

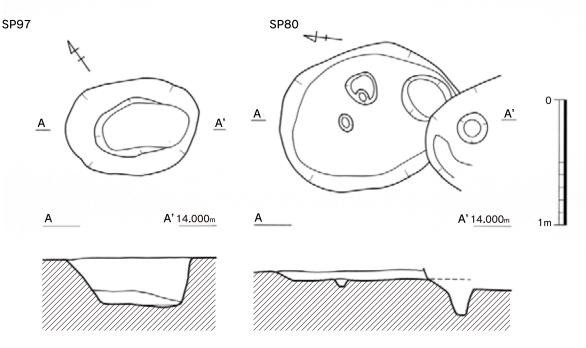
30は土師器小皿。SX05出土のものと同じ形態。底部糸切り。31は青磁椀。外面に鎬蓮弁が刻まれる。龍泉II-b類。32は陶器皿。内面はハケ目状の文様が描かれる。33は鉄釘。断面方形。

#### (4) ピット

調査区内からは300基を超えるピットが 確認された。これらは建物を構成する柱 穴をはじめ、多様な目的で掘られたもの



第11図 SD01 03出土遺物実測図(1/3 · 2/3)



第12図 SP実測図 (1/30)

と推察できるが、残念ながら掘立柱建物・柵列などを構成するようなまとまりのある一群を見出すことはできなかった。以下では、主なもののみを取り上げるとともに、ピット内から出土した遺物について取り上げる。

#### SP97 (第7図)

調査区北側で検出された。長さ1.06m、幅0.80m、深さ35cm。楕円形を呈しており、床面は平らに近い。埋土は灰黄褐色土。須恵器・土師器・磁器が出土したが、図化できるものはなかった。

#### SP80 (第7図)

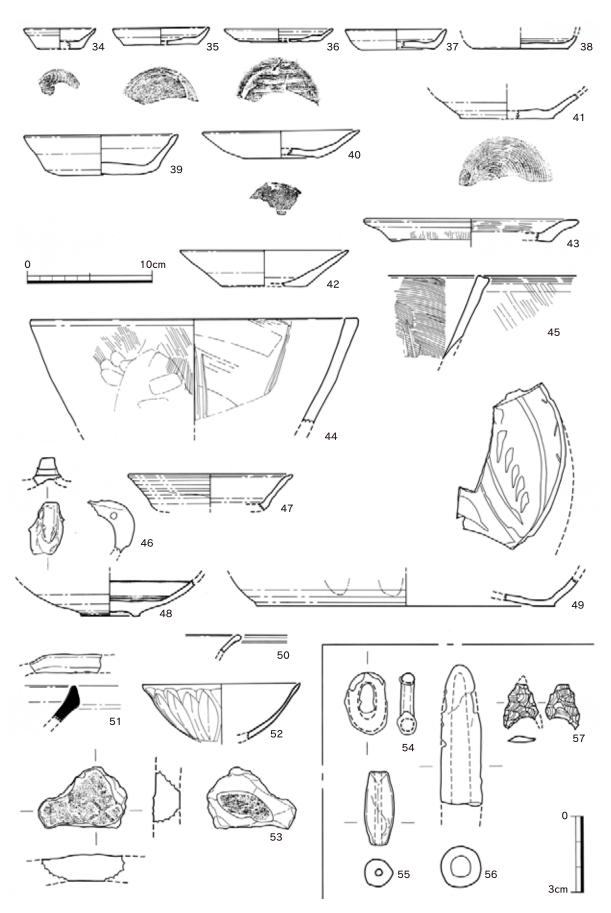
調査区東南側で検出された。SK02に切られる。長さ1.48m、幅1.13m、深さ8cm程度と浅く、平面は楕円形を呈する。土師器・焼土塊が出土したが、図化できるものはなかった。

#### **ピット内出土遺物** (第7図・図版6~8)

34~38は土師器小皿。いずれも底部糸切り。34は口径が小さく、外方へ開き、器高が高い。この他、体部は短く外方へ開いた後、内湾するもの(35・37)と、短く直線的に外方へ開くもの(36・38)がある。39~42は土師器杯。39は底部へラ切りか?40~42は底部糸切り。杯部が深く、底部と体部の境が丸いもの(39)と底部が小さく外方へ大きく開くもの(40~42)がある。43は瓦質土器。器種不明。44・45は瓦質土器擂鉢。内面4本一組の擂目が施される。46は瓦質土器釜の把手。肩部辺りにつくタイプか?47は陶器皿。口縁部に溝縁がつく。48も陶器皿。高台は糸切り後、簡単に削り出したのみで、糸切り痕が残る。内面見込みには砂目が残る。49は陶器盤。内面に施文を行う。50は白磁椀。小さな玉縁がつく。51は須恵器鉢。片口がつく。東播系。52は青磁椀。龍泉窯系。53は平瓦。橙色を呈し、外面斜格子タタキが残る。54は銅製の金具。55は土錘。橙色を呈する。56は小指状の土製品。内部は空洞となる。57は黒曜石製石鏃。

#### (5) 表土・検出面・試掘トレンチの出土遺物

ここでは、表土・検出面・試掘トレンチから出土した遺物について、遺跡の存続時期を決定した



第13図 SP出土遺物実測図(1/3·2/3)

り、重要と思われるものを取り上げる。

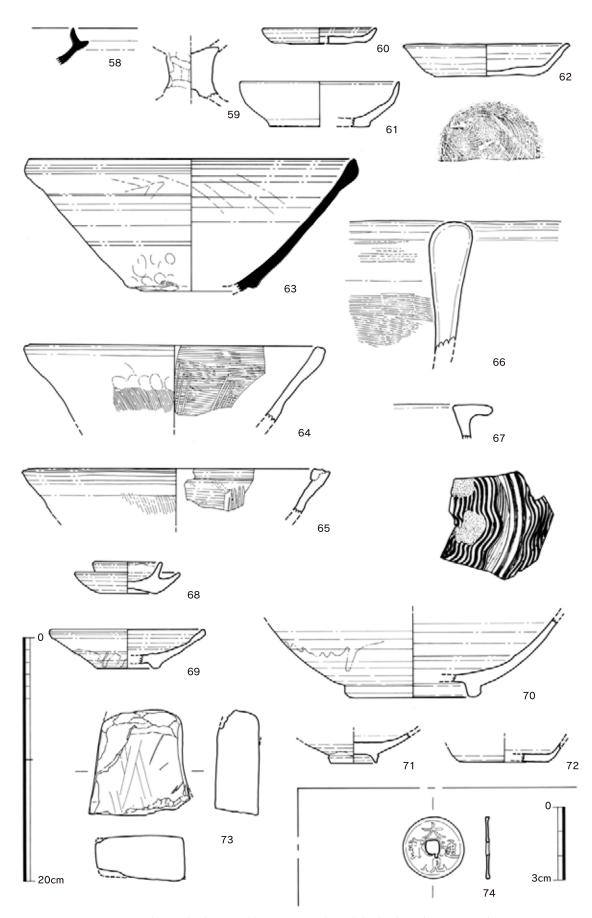
58は須恵器杯身。立ち上がりは高い。59は弥生土器。甕か?60は土師器小皿。底部糸切り。61は土師器杯。体部は丸く、外面煤がつく。62も土師器杯。底部糸切り。63は須恵器鉢。東播系。64は瓦質土器擂鉢。内面ハケメを施した後、3本一組の擂目を入れる。65も瓦質土器擂鉢。口縁部は内方へ突出する。66は土師質土器。板状の厚い体部を持つ。器形不明。67は弥生土器甕。68は陶器。灯明皿で、灰白色の釉が受皿と立ち上がりの内面のみ施される。69は陶器皿。見込みに砂目が残る。高台部露胎。70は陶器鉢。内面刷毛目装飾を行う。見込みに砂目が残る。71は白磁椀。蛇の目見込み釉剥ぎを施す。72は白磁皿。73は砥石。3面を砥面とする。74は銅銭。中国宋代の大観通寶(初鋳1107年)である。

#### 参考文献

小学館1977『世界陶磁全集 12 宋』

山村信栄1990「大宰府出土の瓦質土器」『中近世土器の基礎研究』日本中世土器研究会 山本信夫1990「統計上の土器」『九州上代文化論集』乙益重隆先生古稀記念論文集刊行会 中世土器研究会編1995『概説中世の土器・陶磁器』真陽社 兵庫県埋蔵銭調査会1996『日本出土銭総覧1996年版』

太宰府市教育委員会2000『大宰府条坊跡 X V ― 陶磁器分類編―』 九州近世陶磁学会編2000『九州陶磁の編年』九州近世陶磁学会



第14図 表土・検出面・試掘トレンチ出土遺物実測図(1/3・2/3)

### 表1 川原遺跡第3次調査遺物観察表1

遺物	種類	器種	出土地点	法量 (cm·g) ①口径②器高③底径	形態・技法の特徴	A:胎土 B:焼成 C:色調	備考
番号	十師器	小皿	SK02	※( )は復元·推定 ①(7.8)②(0.9)	体部内外面回転ナデ。底部外	A:密。B:良好。C:灰褐~橙色5YR6/2~	
				③(5.4) ①(9.0)②(1.1)	画糸切り。 体部内外面回転ナデ。底部外	6/8。   A:良、白色石粒を含む。B:良好。C:外面灰白	
2	土師器	小皿	SK02 No.10	③(7.2)	面糸切り。 体部内外面回転ナデ。底部内	色10YR7/1、内面灰白色10YR7/1~8/2	
3	土師器	小皿	SK02 No.8	①8.6~8.9②0.8 ③7.0	面強い不定方向のナデ。底部 外面糸切り。	A:良。 B:良好。 C:内外面浅黄橙色 7.5YR8/6、内面の一部浅黄橙色10YR8/3	ほぼ完形。底部外面 板状圧痕。
4	土師器	小皿	SK02	①(9.2)②(1.55) ③(6.6)	体部内外面回転ナデ。底部外 面糸切り。	A:密。雲母を多く含む。B:良好。C:内外面に ぶい黄橙~明黄褐10YR7/4~7/6。	
5	土師器	杯	SK02 No.8	①(11.4)②(2.6) ③(6.4)	体部内外面回転ナデ。底部外 面糸切り。	A:良、橙色粒子、白色石粒を含む。B:良好。 C:内外面明褐灰色~にぶい橙色7.5YR7/2 ~7/4	底部外面板状圧痕。
6	土師器	杯	SK02 No.8	①(13.0)②(2.8)	体部内外面回転ナデ。底部内 面強い不定方向のナデ。底部 外面糸切り。	A:密。 B:良好。 C:灰白色10YR7/1~に ぶい黄橙色10YR7/3、一部橙色2.5YR7/6 ~6/6灰白。	底部外面板状圧痕。
7	土師器	杯	SK02 No.8	①(12.4)②(2.4)	体部内外面回転ナデ。底部内 面強い不定方向のナデ。底部 外面糸切り。	A:黒色粒・雲母を含む。B:良好。C:外面浅黄 橙10YR8/4、一部にぶい黄橙色10YR7/4、 内面浅黄橙色10YR8/3。	底部外面板状圧痕。
8	土師器	杯	SK02 No.9	①13.4②2.5 ③9.5	体部内外面回転ナデ。底部内 面強い不定方向のナデ。底部 外面糸切り。	A:白色石粒を僅かに含む。雲母多し。密。B: 良好。 C:外面橙色5YR6/6~にぶい褐色 5YR5/4、内面橙色5YR6/6。	ほぽ完形。底部外面 板状圧痕。
9	土師器	杯	SK02 No.4	①(15.0)②(2.95) ③(10.5)	体部内外面回転ナデ。底部内 面強い不定方向のナデ。底部 外面糸切り。	A:密。雲母を多く含む。B:良好。C:内外面橙 色7.5YR7/6~7/8。	底部外面板状圧痕。
10	土師器	杯	SK02 No.5	①(13.8)②(2.4) ③(9.0)	体部内外面回転ナデ。底部内 面強い不定方向のナデ。	A:精良、僅かに雲母を含む。B:良好。C:外面 にぶい黄橙色10YR7/3、内面灰白色 10YR8/2	
11	土師器	鍋	SK02 No.1	①(33.0) ②8cm以下	口縁部回転ナデ、体部外面ナ デ。体部内面不定方向の板ナ デ。	A:白色砂粒を多く含む。やや粗。B:良好。C: 外面浅黄橙10YR8/3、内面黄橙10YR8/6。	体部内外面スス付着。 ただし頸部外面のみス ス無し。五徳の痕跡か?
12	鉄製品	刀子	SK02	残存長4.4、 残存最大幅(1.1)、 残存最大厚(0.5)	錆び膨れをしている。刀身部 の断面は台形を呈すか。		
13	鉄製品	刀子	SK02	残存長7.25、 幅1.9、 厚さ0.4(刀部)	両端部欠損。		
14	鉄製品	刀子	SK02 No.1	刀身長(7.8)、中子長 (3.8)、切先幅1.3、 切先厚さ0.3	錆び膨れ激しい。		
15	土師器	小皿	SX01	②残存高2.1③4.1	底部外面を除き、回転ナデ。底 部外面糸切り。	A:精良。1mm以下の石英粒・白雲母微粒を わずかに含む。B:良好。C:灰白10YR7/1。	
16	黒色土器 A類	椀	SX01	②(2.75)	内面摩滅のため調整不明。	A:1mm以下の石英・長石粒を少量含む。B: 良好。C:外面灰白色10YR8/2、内面黒褐色 2.5Y3/1。	
17	陶器	Ш	SX01	①13.9②2.8~ 2.85、高台径4.7	内面・外面回転ナデ。高台は 削り出し。低い。体部下半露 胎。高台畳付砂目。	A: 精良。B:良好。C:胎土にぶい黄橙 10YR7/2、釉灰オリープ7.5Y5/2透明釉。	肥前系陶器II期。
18	磁器	丸椀	SX01	②残存高2.9	器面全体に透明釉で施釉。体 部外面に染付文(花)を施す。	A:精良。B:良好。C:灰白色N8/。釉灰白色2.5GY8/1。	肥前系染付か?
19	瓦質土器	火鉢	SX02 2区	②残存高4.8	内面ナデ。外面突帯約1cm下よりナデ、他は回転ナデ。	A:密。B:堅緻。C:褐灰~黒褐10YR5/1~3/1。	突帯上部に丸に三 つ巴のスタンプ文 あり。
20	瓦質土器	鉢	SX02 4区	①(29.4) ②残存高5.1	内面~外面口縁部下回転ナデ。外 面残存下部ハケメのちナデ。片口部 は内外面とも回転ナデ後押し出し。	A:きめ細かく精良。B:良好。C:灰白~黄灰 2.5Y7/1~5/1。	捏鉢か?
21	磁器	椀	SX02 3区	①(11.6) ②残存高3.75	口縁部外面に二重圏線文、内 面に圏線文を染付けている。	A:精良。B:良好。C:胎土灰白色N8/、釉灰白色2.5GY8/1、透明釉。	肥前系。18世紀代
22	青磁	水注?	SX02	①3.8②1.7、ツマミ 径1.15	外縁部を打欠く。内面回転ナ デ。外面施釉。内面露胎。	A:精良。B:良好。C:胎土灰白色2.5Y8/1。露胎部橙色7.5YR7/6。釉明緑灰色5G8/1。	
23	銅製品	古銭	SX02 2区	直径2.3、厚さ0.1	表面を内側にして二枚の古銭が引っ付いている。うち一枚は外反している。杭4 付近出土の古銭に比べ、薄く、小さい。		
24	土師器	坩堝か?	SX04 1⊠	①(12.8)②3.45~ 4.3③(7.7)	内外面とも指オサエ・ナデ。	A:2mm以下の石英・長石粒及び金雲母微粒を含む。B:良好。C:外面にぶい黄橙色10YR7/4、内面 灰黄褐色10YR6/2~にぶい橙色7.5YR6/4。	外面スス付着。
25	土師器	小皿	SX04 4⊠	①(8.5)②1.75 ③(6.0)	体部内外面回転ナデ。底部外 面糸切り。	A: 微細な白色砂粒、金雲母微粒を少量含む。B:良好。C:内外面にぶい橙5YR7/4~灰 黄褐色10YR6/2。	灯明皿か?
26	土師器	小皿	SX04 南北ベルト	①(8.3)②1.15 ③(6.4)	体部内外面回転ナデ。底部外 面糸切り。	A:精良、微細な白色砂粒、金雲母微粒及び、 赤褐色粒子をわずかに含む。B:良好。C:橙 色7.5YR7/6~にぶい黄橙10YR7/3。	
27	土師器	小皿	SX04 1区	②残存高1.3 ③(6.8)	体部内外面回転ナデ。底部内 面強いナデ。底部外面糸切り。	A:金雲母を多く含む。B:良好。C:灰黄褐色 10YR6/2。	底部内面スス付着。 灯明皿か?
28	土師器	小皿	SX05	①(6.1)②1.5 ③(3.7)	体部内外面回転ナデ。底部外 面糸切りか?	A: φ 1mm以下の石英・長石粒及び金雲母微粒・赤褐色粒子をわずかに含む。 B: 良好。 C:7.5YR7/4にぶい橙。	
29	陶器	Ш	SD01 1区	②残存高1.75、 高台径4.6	内面回転ナデ。体部外面回転 ヘラケズリ。高台削り出し。高 台畳付に砂目3ヶ所あり。	A:やや砂っぽく、粗い。B:良好。C:胎土にぶい 橙色7.5YR6/4、一部灰黄褐色10YR5/2。釉 灰オリーブ5Y5/3の上に明青灰色5B7/1。	肥前系陶器 II 期、外面は被熱される。
30	土師器	小皿	SD03 1区	②残存高1.3 ③(3.7)	底部外面以外は回転ナデ。底 部外面糸切り。	A:0.5mm以下の石英·長石粒及び金雲母微 粒をわずかに含む。B:良好。 C:にぶい黄 橙10YR7/3~.にぶい橙5YR7/4。	

### 表2 川原遺跡第3次調査遺物観察表2

青磁	44.5			由帝 口经如从三口和 1 ~		
	椀	SD03 1区	②残存高2.9	内面・口縁部外面回転ナデ。 体部外面片切蓮弁文。釉は透 明釉、大きく氷裂。	A:精良。B:良好。C:胎土灰色5Y6/1、釉オリーブ灰色2.5GY6/。	龍泉窯系 II -b類。
陶器	Ш	SD03 2区	①(13.6) ②(2.45)	内面・外面体部1/2回転ナデ・ 施釉。外面下半露胎。見込に白	A:やや粗。B:良好。C:胎土暗黄褐色 5YR3/6。釉灰黄色2.5Y6/1。文様灰白色 2.5Y8/2。	肥前系陶器II期。
鉄製品	釘	SD03 2区	残存長6.9、 残存幅1.4、	断面方形か?		
土師器	小皿	SP26	①(5.9)②(1.65) ③(3.8)	底部外面を除き回転ナデ。底 部外面糸切り。	A:密。B:良好。C:灰白~にぶい黄橙 10YR7/1~7/2。	
土師器	小皿	SP58	①(7.7)②1.35 ③(6.2)	底部外面以外は回転ナデ。底 部外面糸切り。	A:密。B:良好。C:浅黄橙色10YR8/4。	底部外面板状圧痕。
土師器	Ш	SP235	①(8.5)②1.05	底部外面以外は回転ナデ。底 部外面糸切り。	A:0.5mmの石英・長石を少量、雲母を多量に 含む。B:良。C:外面にぶい黄橙色10YR7/4。 内面5YR7/6橙。	底部外面板状圧痕。
土師器	小皿	SP156	①(8.2)②1.6 ③(5.8)	底部外面を除き回転ナデ。底部外面回転?糸切り。内外面ともに鉄分?の付着あり。	A:密。B:良好。C:灰白~にぶい黄橙 10YR7/1~7/2。	
土師器	小皿	SP261	①9.0②最大1.1 ③7.6	底部内外面共にナデ。体部は 内外面共にヨコナデ。全体に もろい。	A:密。B:不良。C:浅黄橙色10YR8/3~8/4。	
土師器	杯	SP14	①(12.3)②3.2 ③(9.0)	内外面ともに回転ナデ。全体 的に歪み、摩滅が激しい。	A:密。雲母を多く含む。B:やや不良。C:にぶ い橙色7.5YR7/4~6/4。	
土師器	杯	SP69	①(12.6)②2.15③ (5.8)	体部内外面回転ナデ。底部内 面中央静止ナデ。底部外面糸 切り。	A:密。B:良好。C:灰白~灰黄褐色10YR8/2~6/2、黄橙色7.5YR8/8。	
土師器	杯	SP10	②残存高2.0 ③(7.5)	体部内外面回転ナデ。底部内 面中央静止ナデ。底部外面糸 切り。	A:密。B:堅緻。C:灰白~浅黄橙7.5YR8/2~8/3。	体部内外面とも一部スス付着。灯明皿か?
土師器	杯	SP104	①(13.4)②(2.9) ③(6.8)	底部外面を除き回転ナデ。底 部内面静止ナデ。底部外面糸 切り。	A:やや粗。2.5mm以下の砂粒を多く含む。B: 良好。C:灰白~浅黄橙7.5YR8/1~8/3。	底部外面板状圧痕。
瓦質土器	不明	SP33	①(17.2) ②残存高1.8	内外面ともに回転ナデ。体部内面上位ヨコハケ、屈曲部以下回 転ナデ。体部外面下位タテハケ。	A:精良。B:良好。C:灰色N6/~4/。破断面褐 灰~にぶい黄橙10YR6/1~6/3。	
瓦質土器	擂鉢	SP174	①(26.2) ②残存高8.5	内面ヨコ左上がりのハケメ。 外面タテハケのちナデ。口縁 部ナデ。	A:密。B:堅緻。C:灰~暗灰色N6/~3/、にぶい黄橙色10YR7/2~7/3。	
瓦質土器	擂鉢	SP199	②残存高6.5	内面左上がりのハケメ。中位以 下はハケの後擂目を施す。外 面中位以下ナデ。口縁部ナデ。	A:密。B:良好。C:黄灰~黒褐色2.5Y4/1~3/1。断面灰白色7.5YR8/1~8/2。	
瓦質土器	釜	SP255	把手幅1.2、把手厚 さ1.75、穿孔径0.5	瓦質だが、孔より上部は焼成不良のためか褐色を呈すが、器面は磨いたように つるつるしている。調整は全体がナデ。	A:密。B:良好。C:灰色N4/。把手上部明褐色 ~橙色5YR7/1~7/6。	
陶器	Ш	SP244	①(13.0) ②残存高2.85	内外面共に回転ナデ。内面全 体に施釉。外面下半露胎。	A:密。B:良好。C:褐色7.5YR4/3~4/6。釉 灰オリーブ色7.5Y5/2~4/2。	
陶器	Ш	SP161	②残存高2.9、 高台径4.65	体部内外面回転ナデ。外面下半露胎。見込内面に砂目、高台に砂 目痕あり。高台糸切り後削り出し。	A:精良。B:堅緻。C:胎土褐灰色10YR6/1~にぶい黄橙色6/4。釉灰色7.5YR6/1~灰オリーブ色6/2。文様灰オリーブ色7.5YR4/2~オリーブ色。	肥前系陶器II期。
陶器	盤	SP67	②残存高2.4 ③(23.6)	体部外面回転ナデ。底部外面 ナデ。	A:粗。3mm以下の石英・長石を多量に含む。 B:良。C:外面底部にぶい褐色7.5YR5/4、内 面灰オリーブ色5Y6/2、文様2.5Y6/6明黄褐。	体部外面重ね焼痕 か?
白磁	椀?	SP265	①(18.0) ②残存高1.45	内外面共に回転ナデ。	A:密。B:堅緻。C:灰白色2.5Y8/1~8/2。釉 内面灰白色5Y8/1~8/2。釉外面灰白色~ 灰黄色2.5Y8/2~7/2。	
須恵器	鉢	SP263	②残存高2.95	内外面ともに回転ナデ。	A:密。B:堅緻。C:灰~暗灰色N4/~3/。	
青磁	椀	SP67	①(12.4) ②残存高4.4	内外面とも回転ナデ。残存部 器面全体に施釉。外面に連弁 文が施される。	A:精良、0.5mm程度の石英・長石を微量に含む。B:良。C:明緑灰色5G7/1。	龍泉窯 II -b。
瓦	平瓦	SP268	残存長4.8、残存幅 7.0、最大厚2.1	凸面;斜格子タタキ。凹面;布 目。	A:粗。0.5mm~5.0mm大の石英を多く含む。 B:やや不良。C:橙色5YR7/6~6/6、橙~明 赤褐色2.5YR7/6~5/6。	
銅製品	不明	SP09	長さ(2.35)、幅(1.4)、 太さ直径(0.4)	何かの付属金具か。孔などは 確認できない。		
土製品	土錘	SP190	長さ2.9、直径1.1	上下は切断の後、ナデ。曲面 はミガキのような丁寧なナデ で仕上げられている。	A:密。B:良好。C:橙~赤褐色5YR6/8~ 4/8。	
土製品	不明	SP197	残存長5.6、 残存径1.6	ナデ。摩滅が激しい。片方は孔 が貫通しない形状(弾丸形)。孔 は比較的中央に穿たれている。	A:密。B:良好。C:にぶい黄橙10YR7/2~7/3。	
石製品	石鏃	SP297	長さ1.8、幅1.0、 厚さ0.25	素材はやや気泡が混じる。抉 りはやや浅い。		先端部·脚部一部欠 損。
須恵器	杯身	東西試掘トレンチ	立ち上がり高1.2	内外面共に回転ナデ。	A:やや粗。白色石英粒を含む。B:良好。C:灰白色N8/。	
<b>弥生土器</b>	甕	出土遺構不明	②残存高3.2	器面全体の摩滅が激しく、調整が不明、ナデか。	A:やや粗。0.2mm大の砂粒を多く含む。B:良好。C:橙色5YR7/8~6/8	
土師器	小皿	東西試掘トレンチ	①(9.4)②1.3 ③(7.5)	底部を除き回転ナデ。底部内 面回転ナデのちナデ。底部外 面糸切り。	A:2mm以下の石英・長石粒及び赤褐色粒子・金雲母微粒をわずかに含む。B:良好。C: 灰白色10YR8/2。	
土師器	杯	SK02 北側1段掘り下げ時	①(13.1)②3.7 ③(8.2)	内外面ともナデ。体部内面中位 から底部にかけて黒斑、外面の 残存部全体に黒斑、スス付着。	A:密。B:良好。C:浅黄橙~にぶい橙 7.5YR8/4~6/4。	体部上位はやや焼 け歪んでいるか。
土師器	杯	東西試掘トレンチ	①(13.6)②2.65 ③8.5	底部を除き回転ナデ。底部内 面回転ナデのちナデ。底部外 面糸切り。	A:1mm以下の石英·長石粒及び金雲母微粒を わずかに含む。B:良好。C:外面にぶい黄橙~ 明黄褐10YR7/3~7/6。内面7.5YR7/6橙。	底部外面板状圧痕。
	失 土土土土土土土土 質質質陶陶陶白真青 阿里土土石真体土土土 製師師師師師師師師師 和土土土土 質質質陶陶陶白東青 瓦製製製恵土 師師製師師報器器器器器器器器器器器器器器器器器器器器器器器器器器器器器	the state of the	映製品 釘 SD03 2区   上師器 小皿 SP26   上師器 小皿 SP58   上師器 小皿 SP156   上師器 小皿 SP261   上師器 杯 SP14   上師器 杯 SP69   上師器 杯 SP10   上師器 杯 SP104   工質土器 不 SP104   工質土器 本 SP174   工質土器 素 SP174   工質土器 素 SP255   陶器 皿 SP255   陶器 皿 SP244   陶器 皿 SP161   陶器 型 SP244   陶器 皿 SP265   項惠器 本 SP265   項惠器 本 SP263   青青磁 本 SP268   科型 SP190   上製品 不明 SP197   工製品 不明 SP197   工製品 不明 SP297   項惠器 本 財政 財政   工業 工業 工	大製品	(2)(2.45)	安子   日本

#### 表3 川原遺跡第3次調査遺物観察表3

63	須恵器	捏鉢	東西試掘トレンチ	①(27.3)②10.8 ③(10.4)	体部内面上半から体部外面上半回転 ナデ。体部外面下半指オサエのちナ デ。体部内面下半摩滅で調整不明。	A:0.5mm前後を主体に最大でφ3.0mmの石 英・長石粒及び赤褐色粒子を少量に含む。B: 良好。C:2.5Y5/1(口縁)~7/2黄灰~灰黄。	東播系。
64	瓦質土器	擂鉢	杭11周辺1段下げ	① (24.7) ② (6.25)	体部内面ハケ目のち擂目。口縁 部ヨコナデ。体部上位1/3ナデ、 中位指オサエ、下位ハケ目。	A:2.0m以下の石英·長石粒をわずかに含む。B:良好。C:外面灰色N5/~黄灰色2.5Y6/1。内面灰白色2.5Y7/1。	
65	瓦質土器	擂鉢	遺構検出時	①(25.2)②(3.7)	口縁部内側に折り返したのちヨコナデ。体部外面粗いハケ目のちナデ。体部内面粗いハケ目のちコナデ、下位はのち擂目。	A:2.0m以下の石英・長石粒をわずかに含む。B:良好。C:暗灰色N3/。外面一部銀化する。	
66	土師質土器	不明	杭1-杭4検出時	②残存高(10.8)	体部外面ナデ。口縁部ヨコナデ。体部内面 口縁部周辺は粗いハケ目のちヨコナデ。 残存部内面中位以下ハケ目のちナデ。	A:0.5mm~2.0mmの石英·長石粒を多く含む。 B:良好。C:灰黄色2.5Y6/2(破断面黒褐色 2.5Y3/1)。	
67	弥生土器	甕	杭1-杭4検出時	②残存高2.7	摩滅のため調整不明。	A:1mm以下の白色石英粒を多く含む。B:良好。C:淡橙色5YR8/3。	
68	陶器	灯火具	北側検出時	①上皿(5.7)下皿 8.7②2.6③4.8	上皿・下皿上半回転ナデ。下皿下半回 転ヘラケズリ。体部内外面に施釉、ただ し下皿外面、上皿・下皿口縁部は露胎。	A:精良B:良好C:胎土黄灰色土7.5YR5/1、露胎部褐色~にぶい橙色7.5YR4/6~6/4、釉灰白色~灰7.5Y8/1~10YR6/1	
69	陶器	Ш	北側検出時	①(12.8)②3.2、 高台径(5.2)	高台は糸切り後、削り出し。体部内面と 外面上半施釉。体部外面下半露胎。高 台畳付1箇所、見込2箇所に砂目あり。	A: やや粗。B:良好。C:胎土黄灰色 2.5YR6/1。露胎部にぶい褐色7.5YR5/4。 釉オリーブ褐色。	肥前系陶器II期。
70	陶器	鉢	カクラン6	②(6.55)、 高台径(11.2)	底部内面・体部外面上位回転ナデ。体部下部回転ヘラケズリ。高台削り出し。体部上位に施釉、下部は露胎。見込砂目あり。	A:やや粗。B:良好。C:胎土橙色2.5YR6/6。釉 外面灰色10YR5/1、内面灰黄褐色10YR4/2施 釉後に灰白色2.5Y8/2で刷毛目文様を施す。	肥前系陶器Ⅱ~Ⅳ 期。
71	白磁	椀	表土はぎ	②(2.5)、 高台径3.8	内面回転ナデ。体部外面回転ヘラケズリ。 高台は削り出し、露胎。2箇所の砂目あり。 体部内外面共に施釉。見込蛇ノ目釉剥ぎ。	A:精良。B:良好。C:胎土灰白色5Y5/1。露胎部にぶい橙7.5YR7/4。釉灰白色2.5GY8/1。	肥前系?
72	白磁	Ш	表土はぎ	②(1.65)③(7.3)	内面回転ナデ。外面回転へラケズリ。 体部内外面施釉。透明釉。底部は施 釉後へラ状工具で釉を伸ばしている。	A:精良。B:良好。C:胎土灰白色7.5Y8/1。釉灰白色2.5G8/1。	平底皿V類もしくは 区類。
73	石製品	砥石	杭1-杭4検出時	残存長8.65、幅 8.35、厚さ3.75	砥面4面。研いだ方向は石の遺 存面に対して平行ではない。	A:細粒砂岩か。	
74	銅製品	古銭	杭4付近 古銭	直径2.5、厚さ0.15	表面の外郭はほぼ見えなくなっているが、銘は「大」「通」「寶」が判読できる。 裏面の外郭は表面に比べ残りが良い。		大観通寳。

# IV. まとめ

#### 1. 遺構の時期

今回の調査は200㎡あまりであったが、土坑 (SK・SX) ・溝 (SD) ・ピット (SP) や様々な遺物が出土した。SK02は18世紀代の染付片を少量含むが、13世紀中頃の土師器がまとまって出土しており、この時期の所産と考えておく。SX01は、17世紀代の陶器皿を含み、染付も同じ時期と考えられる。SX02は火鉢が14世紀後半以降、鉢は15世紀以降であるが、染付は18世紀以降のもので、この時期と考えられる。SX04は18世紀代の染付片を1点含むが、土師器は13世紀中頃のものである。SX05出土土師器は、詳細は不明であるが14世紀以降のものであろう。溝は一部13世紀代の青磁を含むが、その他は17世紀前半と18世紀代のものを含み、新しい時期が考えられる。この他、ピットや検出面からは11~18世紀の遺物が出土しているが、10世紀以前のものは非常に少ない。

以上をまとめると、13世紀中頃にSK02・SX04をあてることができ、SX05は14世紀以降、SX01が17世紀代、SX02と溝は18世紀代と考えられる。建物を復元することはできなかったが、調査地内は主として13世紀以降、集落が連綿と続いていたものと考えられる。

また、図化できなかったが、SX02などで土壁が焼けたような焼土塊が遺構埋土中から多く出土している。これは、後述する本光寺の寺院明細帳(明治25年作成)にある天正年間(1573~1591年)の兵火に係わる可能性もある。天正年間の兵火と言えば、筑前では筑紫広門が天正11年に立花寺周辺の村を襲ったこと、天正14年に島津軍が岩屋城や立花城に押し寄せたことが知られており、この時に本光寺ならびに近くの村が焼けた可能性がある。

#### 2. 中世の畑詰村と本光寺

川原遺跡の調査では、今回の調査地の北西側100mで調査された1次調査地で13世紀後半~14世紀 前半の土坑などが確認されている。今回の調査と合せると、13世紀ごろに始まる集落が周辺に広がる と考えられる。以上から、江戸〜明治時代に続く畑詰村の始まりが中世に遡ると推測できる。

畑詰村周辺の中世を考える上で欠くことができないのは本光寺の存在である。本光寺は3次調査地の南東側70mに近接し、正平年中(1346~1369年)の創建と伝えられる。この伝承の真偽は明らかではないが、本尊である十一面観世音が鎌倉時代末期から室町時代初期の作とされ、また小字に寺名が残っていることからすると信憑性は高いものと思われる。このことから、13世紀ごろに始まる御笠川沿いに成立した中世集落の近くに14世紀中頃に寺院が建てられるという集落景観が復元することができ、今後の調査で内容がより明らかになると思われる。

#### 3. 大野城市内の中世集落と川原遺跡

川原遺跡の内容を理解するため、大野城市内の中世集落の状況を概観する。まず、大野城市内の中世集落の発掘調査について概観する。

上大利では、本堂遺跡7次調査で上大利本堂寺と推定される掘立柱建物と遺物群が確認される。11世紀後半~12世紀前半を中心とし、13世紀以降には継続しない可能性が高い。上園遺跡・小水城周辺遺跡でも11~12世紀の遺構が確認されるが、13世紀以降は継続しない。瓦田では、国分田遺跡では11~12世紀ごろの遺構が確認される。石勺遺跡では溝・土坑が検出され、11~14世紀の遺物が出土した。白木原では、後原遺跡(江戸時代の白木原村)は中世に遡る状況はない。後原遺跡の西側に隣接する御供田遺跡では11~12世紀に遡る遺物が出土しているが、全体的な様相は不明である。山田では、御笠の森遺跡(江戸時代の山田村)が11~12世紀に始まる。この遺跡は御笠の森周辺に広がり、12世紀以降継続的に集落が展開し、16世紀には溝を持った区画が出現するが、17世紀後半には溝も埋没し終焉を迎える。また、現在は大字中の範囲に含まれるが、塚口遺跡・森園遺跡などで12~13世紀の墳墓が確認される。乙金では薬師の森遺跡があり、11世紀以降の墳墓・集落が展開する。

次に、文献史料に関して『大野城市史』より抽出していく。観応3年(1352)の史料には、大利村 (後の上大利・下大利村) が安楽寺(後の太宰府天満宮)領、元亀2年(1571)の史料には崇福寺田 があったことが知られる。次いで至徳3年(1386)の記録には、河原田(瓦田)村が安楽寺領に含まれている。白木原村は明応8年(1499)の史料で光明蔵禅寺(今の光明寺)の所領となり、山田村は 博多崇福寺に関係する泉松寺の記録があり、小字に名を残す。乙金村は、大永3年(1523)に大内氏 家臣周布興兼の所領として挙げられる。牛頸では平野庄という言葉が天文15年(1546)に見える。この他、文献史料ではないが、雑餉隈にある木造聖観音立像は応永21年(1414)の銘文がある。この他、中世に遡る可能性のある寺跡として、牛頸大立寺、上大利本堂寺、上大利正専寺、乙金法蓮寺、中千照寺、畑詰本光寺などがある。

以上、発掘調査の成果から、いずれも11~12世紀ごろに集落の出現が認められ、①13世紀以降継続しないもの(本堂・上園遺跡)、②13世紀以降継続するもの(御笠の森遺跡・石勺遺跡)がある。 後原遺跡は中世末ごろに現在の位置に成立するようで、③16世紀末ごろに画期が想定できそうである。

このことから、川原遺跡で検出された中世集落は②の事例にあたり、中世から江戸時代まで同じ場所で継続・発展し、畑詰村として明治時代を迎えるが、中世に遡る文献史料は無い。今後は、全国的な中世集落の調査・研究の動向を踏まえ、より具体的な中世の大野城市の姿を明らかにできるようにしたい。

# 図 版



(1)調査前全景(西から)



(2)調査地完掘状況全景(西から)



(1)SK01完掘状況(北から)



(2)SK01土層(南から)



(1)SK02完掘状況(南から)



(2)SK02遺物出土状況(西から)



(1)SX02焼土検出状況 (西から)



(2)SX02土層(東から)



(3)SX02完掘状況 (西から)



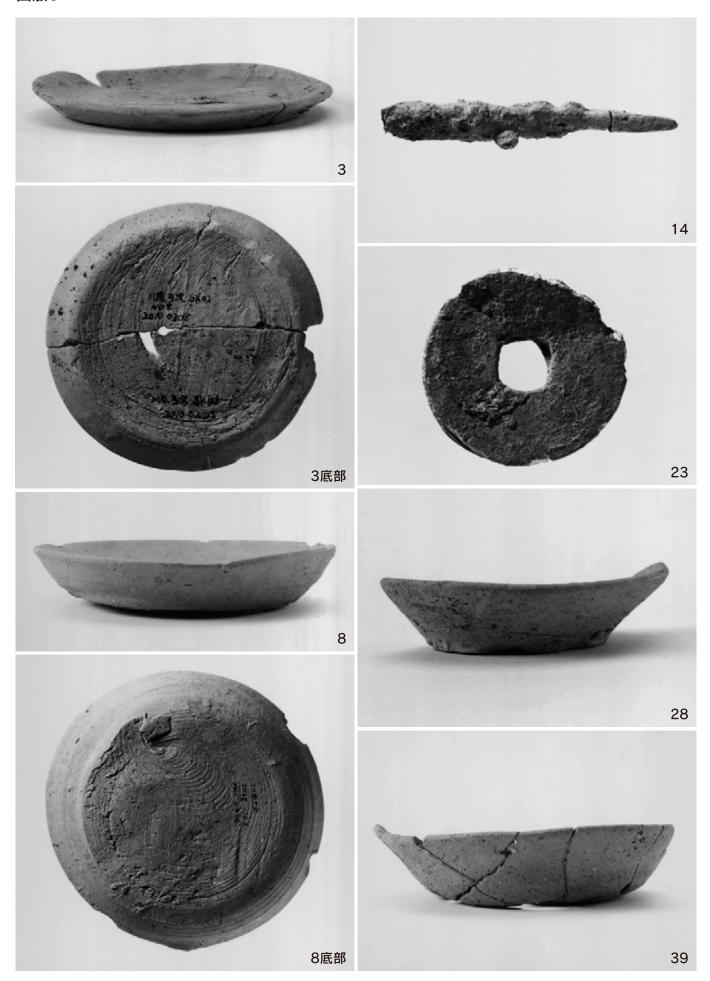
(1)SX01土層(南から)



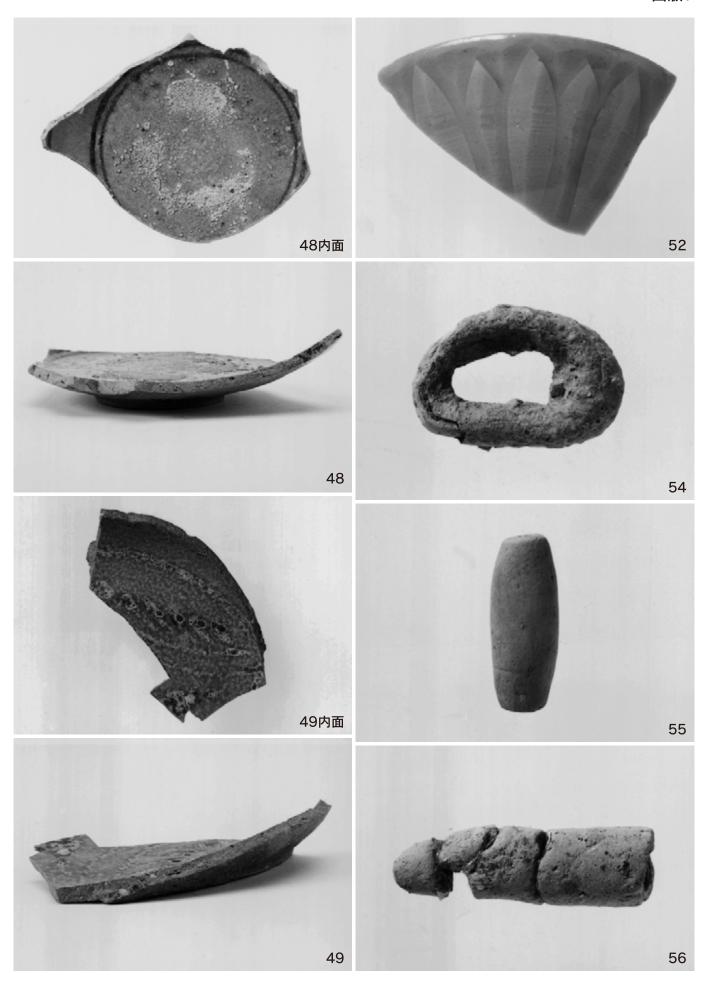
(2)古銭出土状況(西から)



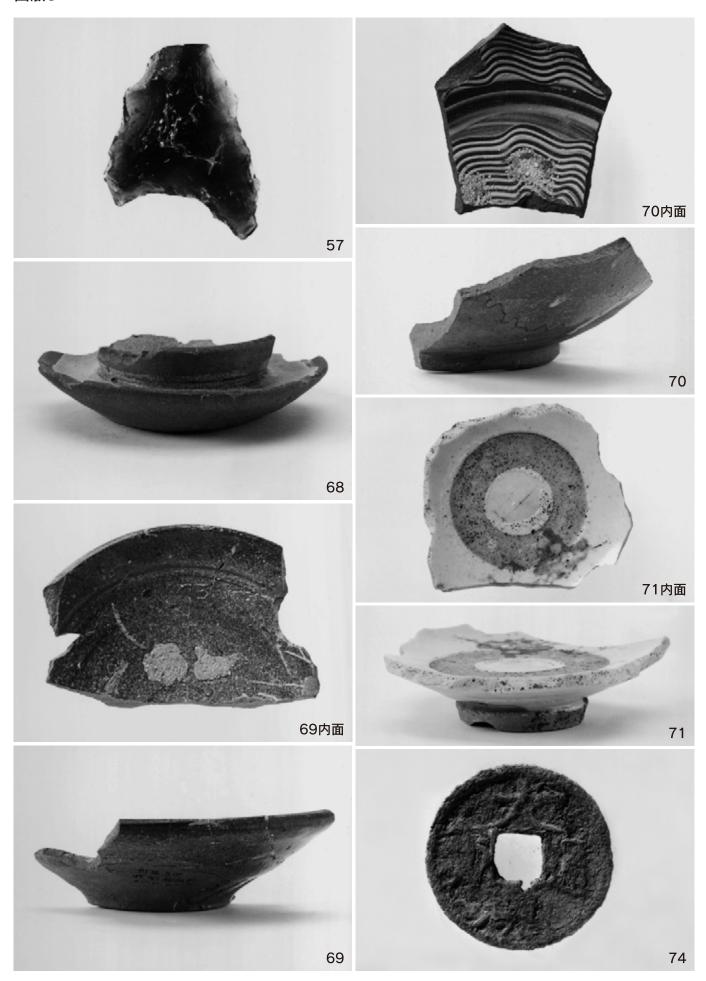
(3)調査区南壁土層(北から)



3次調査出土遺物①



3次調査出土遺物②



3次調査出土遺物③

# 報告書抄録

ふりがな	かわはらいせき に								
書名	川原遺跡Ⅱ								
副書名									
シリーズ名	大野城市文化財調査報告書								
シリーズ番号	第96集								
編著者名	石木 秀啓								
編集機関	大野城市教育委員会								
所在地	〒816-8510 福岡県大野城市曙町二丁目2番1号 電話092(501)2211								
発行年月日	2011年3月25日								
ふりがな 所収遺跡名		りがな f在地		ード 遺跡番号	北緯。, "	東経。, "	発掘期間	発掘面積	発掘原因
かわはらいせき 川原遺跡 第3次調査	福岡県大野	<sup>おのじょうしなかはた</sup> 城市仲畑3丁目 ー1・2			33° 33′ 03″	130° 28′ 23″	2010.1.29 ~3.31	約200㎡	集合住宅 建設
所収遺跡名	種別	主な時代	主な	な遺構	主な	遺物		特記事項	
川原遺跡 第3次調査	集落 平安~江戸 土坑・溝・ピット 器・国産陶器・ 輸入陶磁器								
要約	土坑・溝・ピット (SP) が確認された。出土遺物は、須恵器・土師器・黒色土器・瓦質土器・龍泉窯系青磁・国産陶磁器・鉄器などがある。 遺構の年代は、13世紀代の土坑が最も古く、14世紀以降継続的に遺構が認められる。このことと、近接する第1次調査地の状況から、中世に始まる集落が存在し、近世・近代まで継続・発展することが明らかになった。遺構の埋土中からは、焼土の出土が特徴的であり、周辺で火災があった可能性を示唆する。 文献によれば、正平年中(1346~1369年)の創建と伝えられる本光寺が調査地に近接する。本光寺は、明治25年に福岡県に提出した寺院明細帳に天正年間(1573~1591年)に兵火に罹り焼けたことが記されており、中世集落の成立と景観および展開について興味深い資料を与えてくれる。								

大野城市文化財調查報告書 第96集

# 川原遺跡II

平成23年3月25日

発 行 大野城市教育委員会 福岡県大野城市曙町2-2-1

印刷 (株)アドネット九州 福岡県福岡市中央区渡辺通2-3-27

